

石垣のような街のシンボルとなる交番



南東側から建物を眺める 大きな屋根の家のように見える角度



建物高さを13mとし、駅エントランス付近からも視認性の高い建物形状とします。駅南側のシンボルとなる建築を目指します。

西側横断歩道から建物を眺める。モニュメントのように見える角度



様式12

客溜まりから執務室を眺める



④相談室は執務に隣接させ個室として計画し、プライバシーの保護に配慮。

相談室

仮眠室(女性)

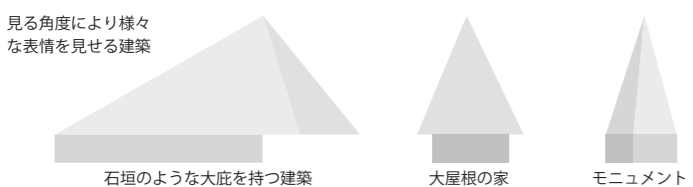
【テーマ2「周辺環境と調和し警察らしさを感じさせる魅力ある施設づくり」について】

周辺環境と調和する福山城の石垣のような親しみやすさと力強さを備えた施設

福山に訪れてとても印象的だったのは、福山駅に隣接する福山城でした。現在では駅を挟んで北側に福山城公園がありますが、計画地は地名からもわかる通り、福山城の三之丸があったエリアです。そこで当時の広大な福山城のエリアを感じられ、かつ街の中へ馴染むデザインとして福山城の石垣の意匠を取り込むことを提案します。見る角度により家のようにもモニュメントのようにも見える象徴的な建築とすることで、交番周辺をいつでも見守っているという安心感や親しみやすく、認識し易く、福山らしさの感じられるシンボルとなる交番を目指します。また、石垣の意匠で、身近な福山城の親しみやすさと城を守るための石垣の力強さを表現し、周辺環境と調和し警察らしさを感じさせる魅力ある交番となるよう図ります。

【特に重視する設計上の配慮事項】

設計プロセスにおいて地域と連携することはもちろんですが、建ててお終いとなる建築ではなく、建てた後も使用され時を経ることで、より地域に馴染み愛される建築となるよう設計したいと考えます。また、県産業の木製家具・県産木材を採用し、地産地消を促進することで愛着のわく建物となるよう考慮します。



見る角度により様々な表情を見せる建築



北西側俯瞰



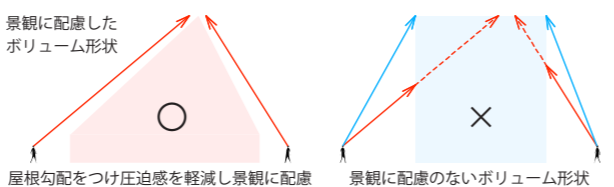
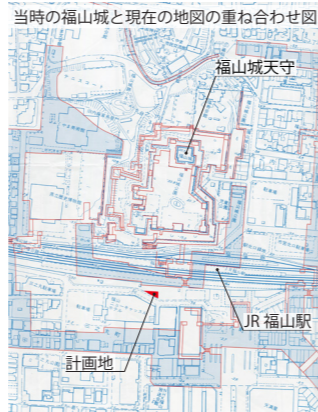
福山城 1888年(明治21年)頃

福山駅に着くと隣に福山城が現れる

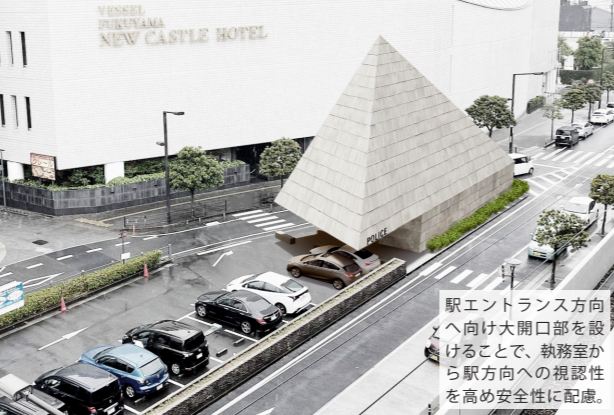
現在の福山城石垣



当時の福山城と現在の地図の重ね合わせ図



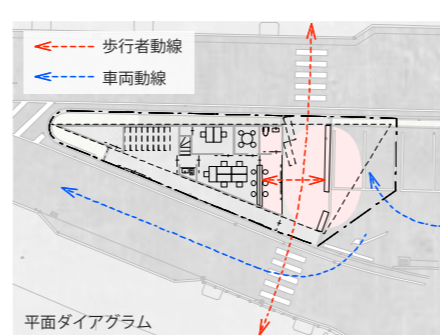
景観に配慮したボリューム形状



北東側俯瞰

【テーマ1「親しみやすさと力強さを備えた機能的な施設づくり」について】

来庁者の動線とセキュリティ範囲を踏まえたシンプルで機能的な交番



平面ダイアグラム

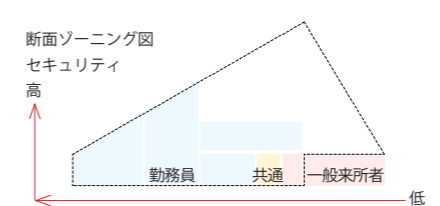


断面ダイアグラム

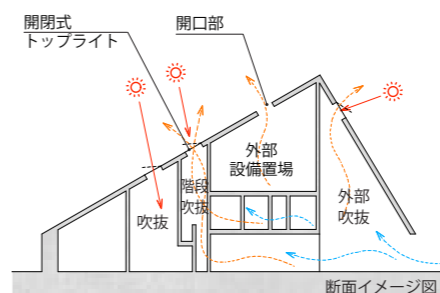
①性別を問わず全ての人が気軽に訪問・相談ができるよう配慮し、新規横断歩道をつないだ箇所を「底下のオープンな外部通路兼外部客溜りスペース」としアプローチ動線と、その通路に面して客溜りを配置します。



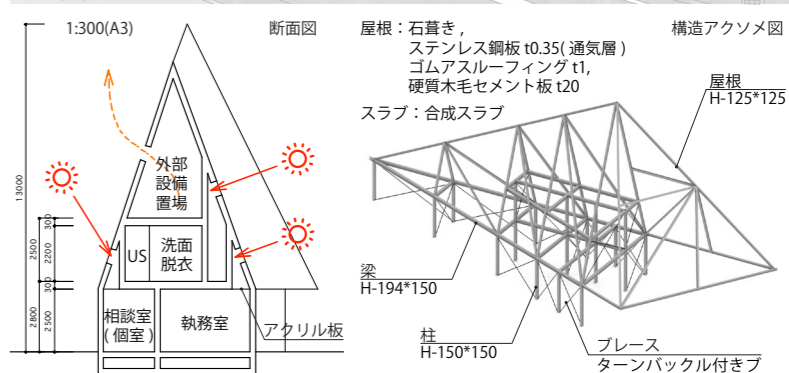
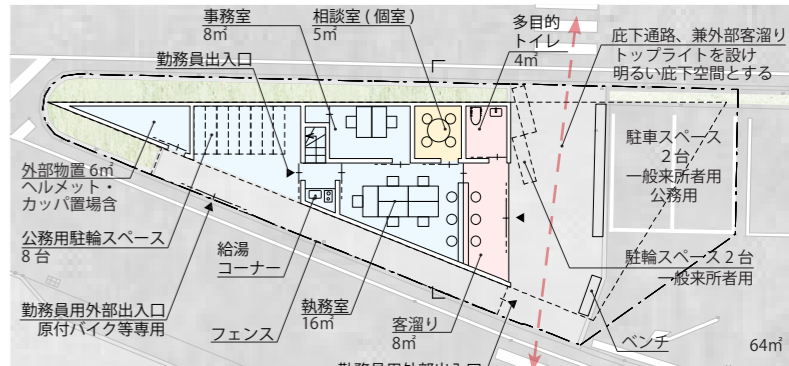
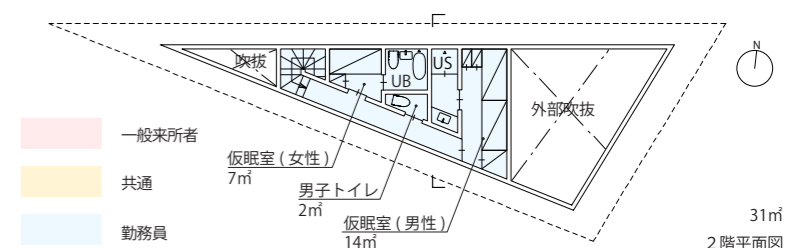
②大きな庇は周辺エリアとの回遊性を生み出す動線をつくることと共に感染症流行や災害時に様々な用途として利用できる場所となります。



④少人数勤務時も、安全な職務執行・セキュリティ管理のしやすさに配慮し、執務室側から受付カウンター越しに出入口及び建物周囲を見通せる配置とすると共に受付カウンターから見て執務室に死角が生じない平面計画とします。底下通路側を一般来所者エリア、1階奥側及び2階を勤務員エリアとする明快なゾーニング計画としました。



⑤自然エネルギーの利活用を図り、ライフサイクルコスト削減に配慮します。各室にはトップライトを設け、自然採光を取り込むことで照明エネルギー削減に配慮します。また、トップライト部には天井高さに合わせてアクリル板を設置し、凹凸のないシンプルな室形状にすると共に、暖気がトップライト部から逃げない仕組みとします。階段部や外部吹抜けを設け、開口部を開け放つことで煙突効果による自然通風を可能とし、空調エネルギー負荷低減及び換気の確保に配慮します。



⑥構造・建設コスト・施工性について
構造は鉄骨造として軽量化を図り、基礎や耐震要素への負担を軽減することができます。これにより浅めの二重スラブ形式のベタ基礎または布基礎とすることができます。耐震要素としてはブレースを十分に設けます。屋根全体を大きな背のトラス構造として利用することによって約8.5mの片持ち状の大庇も少ない鉄骨量で成立させることができます。単純な構成の鉄骨造とすることによって経済性と施工性に配慮すると共に、開放感ある構造とすることができるので周辺の気配を察知しやすい空間を生み出します。